Keio Research Center for Liberal Arts

Newsletter 21

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第 21 号 /2012 年 11 月 30 日発行

Contents

巻頭言	生命の教養学
特集Ⅰ	つなげる、ひろげる、知の共有地 「学びの連携」プロジェクト――SFC と日吉の試み
特集Ⅱ	一筆入魂 第 1 回学生論文コンテスト／学習相談／エディティング・スキルズ
特集Ⅲ	庄内セミナー
特集Ⅳ	研究サポート「研究の現場」から　中尾麻伊香／不破有理／岩下 綾／光田達矢
活動予定	11 月～ 2013 年 3 月
私の○○自慢	

生命の教養学

極東証券寄附講座「生命の教養学」企画委員長
高桑和巳（理工学部）
Kazumi Takakuwa

2012 年度の「生命の教養学」（極東証券寄附講座）はオムニバス講義というスタイルでおこないました。

オムニバス講義では、教養という視点の眼前に開ける茫々たる曠野を暗示することで、受講者を知性の準備へと大まかに誘(いざな)うことが肝要となります。

2012 年度のサブテーマ「成長」は、まさにそのような概観にふさわしかったと言えます。ご登壇を快諾くださった講師のかたたちはこちらの思いに十二分に応えてくださいましたが、さらにオムニバス講義の全体が、いわば成長曼荼羅とでも呼べるような何か、教養なるものの一つの射影であるような何かの姿を呈することになりました。

講師のかたがたのお名前を以下、ご登壇順に挙げることで、その曼荼羅の一端を垣間見ていただくことができるでしょう（敬称略）。三中信宏（生物体系学、農業環境技術研究所上席研究員）。石倉洋子（経営学、大学院メディアデザイン研究科教授）。村上陽一郎（科学史・科学哲学、東洋英和女学院大学学長）。山海嘉之（ロボット工学、筑波大学大学院システム情報工学研究科教授）。古市憲寿（社会学、SFC 研究所上席所員（訪問））。松浦良充（教育学、文学部教授）。斎藤修（経済史・人口学、一橋大学名誉教授）。茅根創（地球システム科学、東京大学大学院理学系研究科教授）。富田庸子（教育心理学、鎌倉女子大学児童学部准教授）。近藤滋（生物学、大阪大学大学院生命機能研究科教授）。奥野景介（スポーツ科学、早稲田大学スポーツ科学学術院教授）。

授業の実際は次のようにおこなわれました。2012 年春学期に開講し、冒頭 1 回（4 月 6 日）はガイダンスに充てました。翌週 13 日から 7 月 6 日まで 11 回にわたり上記の講師の皆さんにそれぞれお話をいただきました（1 時間程度のお話をいただき、その後 30 分は質疑応答とミニレポート作成に充てる）。それを承けて、翌週 13 日にまとめの回をおこないました（受講者に 5、6 人の小グループを作ってもらい、討議後、それぞれに授業をふまえた意見を開陳してもらう）。さらにその翌週 19 日に、それまでの授業すべてをふまえて自由に論述をしてもらう筆記試験をおこないました。

受講者は 60 名弱でした。脱落者もほとんどおらず、各回のミニレポートや期末の筆記試験にもほとんど全員が前向きに取り組みました。質疑応答にも積極的に参加する学生が多数おり、意欲的な学生が好んで履修する科目であることがあらためて確認されました。

『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』（*Les Très Riches Heures du Duc de Berry*、15 世紀フランス写本）の「10 月の暦」。畑を耕し、種をまく農夫たちの営みを城の前景に、背後にはセーヌ川沿いの城郭。種蒔く人の傍らには種をついばむ鳥が待ち構える。当時の農作業の様子を広角に捉えるランブール兄弟のまなざし。

つなげる、ひろげる、知の共有地

「学びの連携」プロジェクトについて

慶應義塾の各キャンパスでは、学生の主体性を育むことをめざし、数多くの教育メソッドが開発され実践されています。それらは、文系・理系の1、2年生が集う日吉キャンパスの学びをさらに活性化させる起爆剤となる可能性を秘めています。また逆に、それらの教育メソッドが生まれ育ってきたフィールドとは、性格もねらいも違う日吉キャンパスの教育に応用してみることによって、メソッドの新たな発展に道が開かれるかもしれません。何よりも、各キャンパスで独自に展開してきた知的挑戦を交流させつなげることによって、慶應義塾の教育力は高まるでしょう。そのような期待と好奇心を原動力に「学びの連携」プロジェクトは行われています。

これまでに「ケースメソッドの効果的運用の試案」「ポストデザイン・ポストシステムの方法論によるイノベーションの新たな地平開拓」の二つの公開セミナーが開催されました。SFCの飯盛義徳先生を中心とした、ケースメソッドを用いた地域活性化や小中高生の主体的学びの育成の取り組み、そして、慶應SDMにおいて展開されている、デザイン思考とシステム思考とのハイブリッドな方法論、WISDM、この二つのメソッドを体験しつつ応用可能性について考えました。さらに、これらのメソッドを人文科学分野の教育に応用すべく実験授業も開催されました。

今後も様々なメソッドによる教育の交流を行い、慶應義塾に「学びの連携」を作り上げていきます。（種村和史）

ケースメソッドを用いたクリティカル・リーディングの試み

ひょんなことからケースメソッドというビジネススクールなどで用いられている方法を文学読解に適用できないかという話になり、実験授業の実施を決めたのが昨年度末でした。ケースメソッドは現場で、数ある選択肢の中からある一つの方法を選択する際に働く意志決定能力を育成する討議型の教育法ですが、こういった意思決定とは無縁と思われる文学の読解にこれを当てはめるのはいささか無理があるように思われました。しかし文学読解での意志決定とは何かと考えたとき、さまざまな読解の可能性が潜在的にあるうち、ある一つの読み方を選択するということになるのではないかと考え、それに基づいてケースを作ることにしました。ケースは原則としてそれを選択したことで人が不幸になるものが好ましいので、学生がレポートや発表原稿を作ったが、それが読解の誤りや甘さから低い評価や批判にさらされるというケースを作りました。

実験授業は8月6日から3日間にわたり行い、谷崎潤一郎『吉野葛』、泉鏡花『高野聖』、クローデルの外交書簡をテキストに用いました。参加者にはテキストを読み込み、その上でケースに描かれている学生の問題点を指摘し、解決策を考えておくよう予め指示しておきました。授業では、最初、少人数のグループで討議をし、そこで出た問題点を解決した上で、全体討議を行いました。実際に授業を行ってみると、何点か問題点も浮き彫りになりましたが、その点については改めて報告したいと思います。（大出　敦）

学びの主体性を育むためには

学びの主体性を育むにはどうすればよいでしょうか。今回のセミナーでは、SFCの取り組みを紹介しながら、実際にケースメソッドを体験していただき、その具体策につながる実践知を創造することに挑みました。ケースメソッドでは、意思決定の場面が記述された「ケース教材」を事前に分析し、問題を発見し、その解決策を模索。教材の主人公の立場で意思決定を行い、クラスでディスカッションします。これを繰り返し行うことで、問題発見・解決能力、行動力などを育むことを目的としています。まさに学びの主体性を育む教育方法といえるでしょう。

しかし、専門職大学院などとは違い、一般的な授業に適用するには工夫が必要です。セミナーでは、まず、ケースメソッドの概要について説明したあと、組織マネジメントをテーマとした体験授業を実施。教職員、学生などの垣根を越えた活発なディスカッションが繰り広げられました。そして、SFCの授業での取り組みなどを紹介しながら、ケースメソッドの効果的な適用について説明しました。最後に、スタッフの拡充、効果測定、教材共有などの課題を提示しました。

ケースメソッドを普及させ、可能性を高めていくためには、いろいろな背景の教員や学生が相集い、多角的な視点からの議論によって知を創造、共有していくことが大切です。まさに今回のセミナーは、そのような問題解決の場になりました。貴重な機会をいただいた皆さまに心から感謝しています。

（総合政策学部　飯盛義徳）

ケースメソッドの多様な適用と可能性

唯一の答えがない現実の課題を、自分が当事者だったら、どのように解決していくのか——それを他者と協働的に議論していくケースメソッド。この手法は、1世紀以上前から医学、法学、経営学の分野で発展し、特にビジネススクールの意欲の高い社会人を対象に用いられてきました。筆者は、2005年、子ども対象の「ジュニアケースメソッド」を開発するプロジェクトVITA+（ビータプラス）を立ち上げました。これまで、各地の高校・中学生が参加し、主体性やコミュニケーション能力、課題発見・解決力などが身に付くと評価されてきました。

第1回セミナーでは、高校生に適用するための工夫を共有した上で、参加者に「自分がケースメソッドを新しい分野に適用するとしたらどうしますか」とケース風に問いかけました。会場では、失敗経験の少ない若者が失敗を疑似体験し、克服する力を身につけるケースメソッド、レポートを添削する人の立場に立ち、どう改善するか考えるケースメソッド、また婚活の場面で、結婚生活の悩みを共に考え、相性を確かめるケースメソッドなど、斬新かつ意義があると感じられる適用方法が生まれました。

私たちの社会には、課題を抱える様々な人や組織が存在します。それは、人や組織の数、また時と場合の数、ケースがあることを意味し、工夫次第で、どのような分野でも、誰でも参加できる可能性を秘めています。セミナーではその芽がいくつも現れたことに希望を感じました。（総合政策学部　西田みづ恵）

読解と議論の活性化のために

文学テクストを使って読書会や演習を行うときにいつも戸惑うのは、どこにゴールを設定すればいいかわからないという点です。ここまで解釈を深められたらOKという基準もありませんし、参加者間でただ意見が一致すればいいというわけでもありません。今回の実験授業は、そうした悩みに一つの解答を与えてくれるようなものでした。「ケースメソッド風テクスト読解」の最大の特徴は、ケース教材が事前に与えられているということです。教材として読解サンプルや設問が与えられることによって、それに対するコメントとして自説を展開することができます。そのことが、参加者間の議論を活発にする要因となりました。ケース教材として選ぶ作品には向き不向きがありますし、しっかりした教材を作るのには時間がかかるという注意点も同時に見えてきました。そのことも踏まえた上で、ケースメソッドを普段の演習等の実践に取り入れてみたいと思います。（文学部3年　松本友也）

新たな知の地平を切り開く—文学を囲んで文殊の知恵

センターが旨とする活動のひとつがキャンパスや分野を横断する取り組みです。湘南藤沢キャンパスのプロジェクト型学習法を文学の授業に結び付けた文学ケースメソッドや日吉キャンパスにある大学院システムデザイン・マネジメント研究科（SDM）と協働で、より能動的な学生参加型授業のプログラム化をめざしています。夏季中に実施された大出副所長によるケースメソッド方式に引き続き、今秋はSDMの協力を仰ぎながらシステム・デザイン手法による文学のワークショップを開催。9月29日（土）にはシステム・デザイン手法をご紹介いただき、11月3日（土）には教育GPで展開した実験授業のテニスン「シャロットの女」を題材に、ブレインストーミングから強制連想法とシナリオグラフという一連のシステム・デザイン手法を援用しながら、詩の読みを深め、共有しながら、創作をすることによって、新しい発想法と言語力の育成につなげる教育プログラムの作成をめざしています。（不破有理）

Keio Research Center for Liberal Arts Newsletter November, 2012. No.21

論文作成＝人生密着型アトラクション!

論文コンテスト連動企画第1弾、論文の書き方セミナー第1回は、「90 分でコツがわかる論文・レポートの書き方」というタイトルで、青山学院大学講師という肩書きでくくってしまうにはあまりにマルチな活躍をなさっているイギリス文学研究者・作家・俳優・演出家（以下略）の泉忠司先生にご登場願いました。

初回ということで、論文執筆への誘い、という意図も込め、論文執筆への意欲をかきたてるような内容をフレンドリーな語り口でお話し下さいました。まずは、論文の３条件「問い」「独自の主張」「その論証」から始まり、論文作成第一の難関「問い」の絞り方、とにかく小さければ小さいほど、具体的であればあるほどよい、というアドヴァイスから、さらには、資料収集については、世の中にあるありとあらゆるものが資料になりうると、学問の世界の広さを力説されました。暫定文献リストの作成や先行研究の整理、論文構成のコツは３拍子など、技術論もありましたが、なんといっても印象に残ったのは、論文作成の経験で得る技術は私たちが考えて行動していく人生を通じて一生有効なスキルであり、論文作成こそ「人生密着型アトラクション」だ、という熱い主張でした。

約 80 名が参加し、質疑応答も時間超過で盛り上がりました。その後、4回のヴィデオ補講も実施しました。（吉田恭子）

第２回「論文の書き方セミナー」開催!

第２回「論文の書き方セミナー」は、中世スコラ哲学の研究者にして、『ぎりぎり合格の論文マニュアル』の作者である山内志朗先生を迎えて、10 月 12 日に行われました。山内先生は時に実体験を交え、時に冗談を交え、スコラ哲学の難解な表現法とは異なる軽妙な語り口で論文作成のツボを学生たちに伝授してくれました。山内先生は長年の卒論指導などの経験から学生が陥りやすい過ち、とりわけ問題意識の持ち方、問題提起に関する注意などを中心に話されました。学生も熱心に聴講し、質疑応答の時間では学生から論文を書いていて実際に直面している問題が提示され、山内先生はそれに対して具体的な例を挙げて対応してくださいました。

講演後に回収したアンケートからは「穏やかな口調にユーモアを交えた話で、楽しく聞くことができた」、「一番ためになりました」、「論文執筆のための詳しい心得がよく説明されていてよかった」など、この講演が有意義であったことが確認できます。また講演で取り上げられたトピックのうち、明晰であることと推敲の重要性が特に印象に残ったようでした。さらに「論文に対するプレッシャーがなくなりました」、「とにかく書き始めようと思いました」などの回答からは、山内先生が論文を書くことに戸惑っている学生の背中を押してくれたことも分かります。一方、聴講した学生が必ずしも論文コンテストにエントリーしているわけではないこともアンケートから分かり、論文執筆のためのセミナーの潜在的な需要を改めて確認することもできました。（大出　敦）

エディティング・スキルズの本質とは

編集者の役割のひとつは、書き手と読み手をうまくつなぐこと。ある原稿（作品）の最初の読者として、論旨は明確か、わかりにくい箇所はないか等を確認し、書き手にフィードバックしていきます。そして、並行してどう見せるか――判型や文字、行間等の体裁はもちろん、リードや見出しを入れていくといったこと――を検討するわけです。その後に、誤字・脱字のチェックを行う校正作業（地味で時間がかかる!）があります。

「エディティング・スキルズ」の授業で、InDesign というソフトを使った DTP（Desktop publishing）の実習を行いました。その後、学生たちは悪戦苦闘しながらも、雑誌「ばらばら」や詩集を制作するなど素晴らしい成果を出しています。しかし、これは「どう見せるか」をパソコン上で実践したにすぎません。この授業の究極の目的は、自分の書いた論文・レポートを客観的な目で確認を行い、どう見せれば効果的かを考え、実践することにあるのではないでしょうか。

その昔、私が担当した本の中に「いい文とは、簡潔明瞭で直接的かつ読み手の興味を引くもの」であり、「unity と coherence が重要」だとありました。英文エッセーの書き方に関するものでしたが、日本語のレポート・論文にも当てはまるに決まっています。（自分のことは棚に上げて言いますが…(^。^;)）エディティング・スキルを学ぶことは、ライティング・スキルを高めることに直結するのだと思います。（慶應義塾大学出版会　小磯勝人）

種から芽までは…学生論文コンテストに賭けた想い

４月 26 日の会議の席上、私が論文コンテストのアイデアを企画書と共に説明した所、好意的な反応でしたが、最後に「応募目標は最終 350 人、但し初年度につき 200 人」と発言した途端、私は一斉に冷たい視線を浴びる羽目になりました。「そんなに来たら審査はどうするのか」という発言でしたが、言外には「そんなに来るわけがないだろう」という感じでした。私は数字を予測した訳でなく、これだけの成果がないと意味がないという人数を計算しただけでした。そんな中でスタートし、目標達成に向けて出来る限りの知恵と汗を振り絞って仕掛けをした結果、何と 192 名のエントリーがあり、喜びもひとしおでした。私はプロジェクトを企画する時に次の４つの事を必ず考えるようにしています。目的、目標、コンセプト、意味づけの４つです。このコンテストのコンセプトは世の中の論文コンテストとは異なります。論文提出までのプロセスを参加者の努力に任せるのではなく、主体性は尊重しつつも、全面的に支援し見守っていこう、そして書くこと・学ぶことの大切さと面白さを啓発することが大学らしい取り組みではないかと考えました。そのためにセミナー、学習相談、推薦図書、メルマガなどを駆使して、論文を書くための啓蒙活動を立体的に連動して行う事が特色です。従ってまだ後半の大事な仕事が残っています。

ところで私は来年３月末で定年を迎えます。その最後にこのやりがいのある仕事を任せ、支援協力して下さった教養研究センターの皆様に深く感謝するとともに、このコンテストの芽が大きく育って、あの銀杏のように葉や実をつけてくれることを願ってやみません。（柴田浩平）

2012 年春学期学習相談活動報告

正式な活動としては３年目を迎えた学習相談ですが、相談員の継続的な活動と広報により、今期の相談件数は 220 件を超え、過去最多の相談件数となりました。相談内容も３分以上の本格的な相談の比率が伸びていることも喜ばしいことです。また今期より、大学院生の相談員も正式にデスクに加わったことで、より幅広い学生へのアドバイスが可能となりました。展示企画では、「どこがダメなの!?わたしのレポート～教えます、正しいレポート作成術とスケジューリング」（６月４日～７月５日）を開催すると共に、新たな試みとして展示と連動した学習相談員による講座、「レポートの書き方講座」を６月４・18 日の２回実施しました。計 61 名の参加があり、学習相談員・参加者ともによい機会となりました。秋学期も独自の企画展示や講座が計画されており、学習相談員の更なる活躍に期待しております。（浅尾千夏子）

単なる個別相談を超えた活動へ

私達ピア・メンターが行っている主たる活動は、学生への個別対応です。これは学生への丁寧なフォローだと評価できるでしょう。しかしその一方で、個別対応を進めることで、個別化・孤立化した学生の学びを助長してしまっているのではないかという見方もできます。このような見方にどのように反論していくのか。それが私の大きな課題でありました。

最近、その課題への回答の糸口がつかめたように思います。それは企画展示への学生の反応でした。本年６月の企画展示では、学習相談の経験を元に、レポートの取り組みの「ダメな例」を展示していました。その展示を見て自分たちの経験を語り合う学生たち。企画展示は学生たちに、自分達の悩みを共有する機会を提供したのでしょう。

学生にはある程度共通の悩みがある。それを共有できる機会があれば、孤立化した学生をつなぎ、学びを豊かにできるのではないか。学習相談活動は、そんな可能性を秘めているように思います。

（社会学研究科博士課程後期　間篠剛留）

現代版「半学半教」の実践

ピア・メンターとは、メディアセンターのカウンターにて学生からの相談を受け付ける学生相談員のことです。私もその一員として活動させて頂いております。これまで相談を待っていたピア・メンターが今回、論文の書き方セミナーという講座に打って出ました。

僭越ながら講師を務めさせて頂いた自分としましては、想像以上に講座が人気で驚いたというのが一番の感想です。30 人の定員で２日開催しましたが、両日とも満員御礼。立ち見が出るほどでした。そのほとんどが１年生だったことにも驚いたとともに、改めて塾生の意識の高さを思い知りました。

セミナー後も個別の質問が多く来ました。教員ではなく学生がセミナーを開いたことで、学生にとっても参加しやすかったのかなと感じます。

単に学問知を蓄積するだけでなく、それを応用し発信すること。教師生徒というリニアな構造に頼らない新たな営みへのきっかけになれたら幸いです。

（経済学部４年生　松下港平）

Keio Research Center for Liberal Arts Newsletter November. 2012. No.21

庄内セミナー

第３回庄内セミナーは 『庄内に学ぶ生命 ― いま敢えて生と死を考える』をテーマに以下のとおり開催しました。事後課題として、参加者に「生命」についてのレポートを提出していただき、そのレポート集を10月末ごろに刊行します。また、関連企画として、庄内ランチ（生協食堂 6/18 ～ 29 実施済み）や写真展・庄内フェア（11 月上旬）を予定しています。

実施期間：8 月 31 日（金）～ 9 月 3 日（月）［3 泊 4 日］
場　　所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス他
参加人数：学部学生 34 名、院生 3 名、社会人 4 名、
　　スタッフ 6 名　合計 47 名
講　　師：加藤元一郎氏（医学部准教授）
　　酒井忠久氏（致道博物館館長）
　　東山昭子氏（鶴岡総合研究所研究顧問）
参 加 費：学部学生、大学院生：1,000 円、社会人：10,000 円
　※ 現地までの往復交通費は自己負担（現地集合・現地解散）
宿泊場所：いこいの村庄内（鶴岡市）

過去と未来を結ぶ庄内の風土――命のつながり

修験道の最終夜の、八朔祭の荘厳な炎を前に、庄内セミナーは始まりました。私も体験させて頂いた修験道とは、滝行や行脚などの荒行を積み生まれ変わるとされる、擬死再生の修行です。

修験道に限らず、庄内には様々な魅力的な伝統が受け継がれています。と同時に、世界最先端を誇る慶應の生命科学研究所もあります。過去に固執するのでもなく、未来だけを見据えるのでもありません。過去と未来とが結ばれる場所、それが庄内に抱いた私の印象です。

庄内には、伝統や理念を、過去から未来へと忍耐強く受け継いでゆこうとする「つながり」の文化があるといわれます。その「つながり」は、生命のつながりをも意味するのでしょう。

私は当初、人は「死んだら終わり」と考えていましたが、庄内の風土に影響されてか、ある人の存在は何らかの形で、遺された人々に繋がると考えるようになりました。「死なれて終わり」ということはありえないのです。

庄内セミナーに参加しても、単位を得られるわけでもないし、ましてや人生の「答え」が見つかるわけでもありません。しかし、ほんの少しだけ立ち止まり、自らの人生と他者とのつながりを顧みるのも大切ではないでしょうか。庄内セミナーはその貴重な機会を与えてくれました。　（文学部１年　坂牛　怜）

スケジュール

１日目	・現地集合（鶴岡市 TTCK） ・「生命」に関するマインドマップ作成 ・羽黒修験「秋の峰入り」八朔祭見学
２日目	・即身仏拝観（注連寺・大日坊） ・松ヶ岡開墾場見学 ・鶴岡市内見物 ・「生命を考える」講師：加藤元一郎氏（医学部准教授）
３日目	・ミニ修験体験 ・「庄内文化論」講師酒井忠久氏（致道博物館館長）・東山昭子氏（鶴岡総合研究所研究顧問）
４日目	・慶應義塾先端生命科学研究所見学 ・マインドマップ２作成 ・懇親会――鶴岡市長を囲んで―― 終了後 現地解散

（日水邦昭）

庄内セミナーを終えて

教養研究センター設置の授業や企画に参加する中で、唯一の心残りが在学中に庄内セミナーを受講できなかったことであり、この度思いがけず参加が叶ったことを大変嬉しく思っています。憧れの庄内セミナーは、以前からの期待に違わぬ素晴らしいものでした。鶴岡で育った食物を味わい、地元の方からお話を聞き、自然や歴史に触れること……庄内地域にどっぷりとつかることこそが、このセミナーの醍醐味でしょう。

セミナーは上記のスケジュールのとおり、体験やセッションが充実しています。これらの体験だけでも十分ですが、受講する方には参考図書をなるべく多く読まれることをお勧めします。知識と体験が合致することで、セミナーはより面白い、深い内容のものになります。

最後になりましたが、羽田先生をはじめとする先生方、日水さん、小磯さん、そして共にセミナーで学んだ皆様に御礼を申し上げるとともに、横山千晶先生に深く感謝いたします。
（独立行政法人　日本芸術文化振興会(国立劇場)　中島雄一）

研究サポート「研究の現場から」

〈第４回〉原爆と病のイメージ

日本学術振興会特別研究員として、医学史の鈴木晃仁先生のところでお世話になっています。原爆のイメージを研究しており、広島に投下される以前にそうした兵器やエネルギーの可能性がどのように想像されてきたか、科学の言説からSF の描写までを検討してきました。また、それらが実際の投下後にどのように変容していくのか、特に放射線障害といった原爆の人体への影響が知られていく過程に着目して検討しています。

来往舎サロン「研究の現場から」では博識の先生方から多くの質問やコメントをいただき、大変勉強になり刺激をうけました。当日の議論は執筆中の博士論文に活かされているところです。貴重な機会を有難うございました 。

（日本学術振興会特別研究員（PD）　中尾麻伊香）

〈第５回〉フランソワ・ラブレーの描写技巧

私はフランス 16 世紀前半の作家、ラブレーの作品を研究しています。現在は「描写」という技巧に焦点をあてて、当時出版されていた文章技巧理論書の規則と、ラブレーの実践を見比べています。描写技巧は、古典からルネサンスにいたるまで、修辞学や詩学、論理学などの分野や著者によりさまざまな定義がなされてきました。ラブレーは作中で、これらを利用しながら、現実にはあり得ない言葉の怪物を作り上げています。意味のゆらぎとイメージの操作を常套手段とするラブレーにとって、描写は格好の創作技巧だったと考えています。　（岩下　綾）

第６回「研究の現場から」

来往舎の風物詩?となり始めた「研究の現場から」は第６回目を迎えます。春学期に１回、秋に２回のペースで先生方のご専門のお話をゆっくり伺える貴重な機会です。研究室が近くても「隣は何をする人ぞ」の感がありますが、この機会にお知り合いも増え、研究のきっかけにもなり、といいことずくめ。専門や学部の枠を超えた研究・交流を目指すセンターならではのサロンです。次回は６回目を迎え、東北大学から移籍なさったばかりの井奥洪二さんに刺激的な「人工骨」の再生医療のお話を、留学から帰られたばかりの伏見岳志さんにはポルトガルのお話を伺います。美味しい○○もあります。予約不要、ふらりとお立ち寄りください。

（不破有理）

12 月 13 日（木）18：15 ～　来往舎 101 にて
井奥洪二（経済学部）
「普通の人々のための再生医療～骨組織再生材料の創製～」
伏見岳志（商学部）
「小さな村の大きな海―あるポルトガル系ユダヤ人コミュニティの記録」

〈第４回〉二世紀の沈黙と 1816 年の喧嘩 ―19 世紀のアーサー王出版事情

英国の活版印刷の父ウィリアム・キャクストンは 1485 年にトマス・マロリーによるアーサー王物語を印刷します。この初版を含め 1634 年まで６回刊行されますが、それ以降、200 年近くマロリーのテキストが出版されることはありませんでした。1816 年に奇しくもほぼ同時期に異なる出版社から刊行された２種類のテキストを取り上げ、ライバル出版社に先を越された悔しさが吐露された比較広告を紹介しながら、18 世紀から 19 世紀の中世復興とアーサー王伝説の出版事情、読者層の違いによる書籍の判型の相違などについて、実際の書籍をお見せしながらお話をしました。参加者の方からはなぜ出版の空白があったのか、ドイツの中世主義運動との関連などの質問もあり、楽しく充実した時間となりました。　（不破有理）

〈第５回〉ウマが転ぶとき―19 世紀末ヨーロッパ都市の対応

長年、馬車はヨーロッパ各都市で欠かせない移動手段でした。そのウマの時代に馬が路上で事故に巻き込まれたとき人々は生き物の扱いに四苦八苦していました。早急に渋滞を緩和させたい警察、痛々しい光景から子供たちを守るべくすぐさま片付けてほしい歩行者、早く動物を苦しみから解放すべきだと主張する動物保護団体、そして自ら容態を確認してからゆっくり対応を決めたい所有者。かくして渦巻く思惑が道路を劇場と化し生死の判断を獣医師が瞬時に下さなくてはなりませんでした。当時は都市部から動物がどんどん姿を消していった時代。その流れの中で人間はどう動物と接していたのかを、ロンドンで転倒する馬の例を用いながら明らかにしました。　（光田達矢）

注目！　研究会助成制度

この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など１件上限 10 万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年２回１月と７月の上旬に締め切り、結果はそれぞれの月末にお知らせします。次回は１月 31 日が締切ですので奮ってご応募ください。
詳細は教養研究センター事務室へどうぞ。

求ム・来往最前線情報！

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ（日時・内容・研究会名・担当教員･連絡先）、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。
教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

11月

【日吉キャンパス公開講座】日本ってなんだろう

開講　9月29日（土）～11月17日（土）

【学びの連携プロジェクト】実験授業「システム・デザインから Alfred Lord Tennyson, “The Lady of Shalott” を読み、分析し、創作する」

11月3日（土）　来往舎 103/104　→特集Ⅰ

【Hiyoshi Research Portfolio】

11月9日（金）、10日（土）　来往舎

【開所 10 年記念企画】学生論文コンテスト

応募締切　11月30日（金）

結果発表　　1月中旬予定

【学会・ワークショップ等開催支援】第 16 回日本レーザー・スポーツ医科学学会

12月1日（土）　体育研究所（スポーツ棟）

【日吉キャンパス特別講座】中国を視る目を養う

12月1日（土）、8日（土）、15日（土）、22日（土）

【研究の現場から】井奥洪二、伏見岳志

12月13日（木）　来往舎101/102　→特集Ⅳ

【学会・ワークショップ等開催支援】慶應義塾演劇ワークショップ no.1

12月19日（水）　来往舎 2F 大会議室

【学会・ワークショップ等開催支援制度】春学期開催分募集

申請締切　2013年1月11日（金）

結果発表　2013年1月31日（木）

【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】プレゼンテーション・コンペティション

【開所 10 年記念企画】アカスキ OB・OG リユニオン

2013年2月6日（水）

12月

【学会・ワークショップ等開催支援】「猿の惑星」から学ぶヒトとサル ―映像・シナリオに秘められたメッセージを読み解く―

11月3日（土）　協生館藤原記念ホール

Hiyoshi Poetry Festival 6

11月8日（木）　独立館地下1階 日吉コミュニケーションラウンジ

【開所10年記念企画】東北支援企画「学びの旅のすゝめ:みちのく見聞録」

JTB主催　2泊3日の旅　3コース

コースA：義経・西行・芭蕉のみちのくを歩く

コースB：古層のみちのく–縄文文化に学ぶ

コースA, B　11月20日（火）～22日（木）

【HAPP】アイヌ文化の現在：さまざまな形、さまざまな今　現代的アーカイブの視点から

公開展示：12月3日（月）～12月8日(土)

来往舎ギャラリースペース

ライブ：12月8日（土）来往舎イベントテラス

【学会・ワークショップ等開催支援】第 6 回アジア医学史学会

12月14日（金）、15日（土）　来往舎

朗読劇「都市日記—慶應日吉キャンパス」

12月22（土）

2013 1月

【学会・ワークショップ等開催支援】「アーツ・アンド・クラフツと民藝」2012 年度研究会 分科会「地域社会：アーツ・アンド・クラフツと民藝運動」

2013年1月12日（土）　来往舎 2F 大会議室

2月

【教養研究センター選書出版】

2013年3月

3月

＊各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

私の調理器具自慢

珍しい名字の乙子の異動により、本ニューズレターの制作担当となりました慶應義塾大学出版会の渡邉と申します。前任者に倣って名前の話を…と思いましたが、残念ながら名字10傑に入る名字なので（「どんなに良い人でも名字10傑の人は紹介しないで」と言っていた甲斐があってか?! 現在の本名は230位ぐらいです）、最近気に入っている調理器具のご紹介を。グリーンスムージーにはまり、ハンディミキサーで作っていましたが、つぶつぶが気になる…と思い切ってハイパワーのミキサーを購入。出来上がりの滑らかさが全然違い、野菜とフルーツを組み合わせを考えるのがとても楽しくなりました。ちなみに、家族を含め周囲がそのような人ばかりで気が付かなかったのですが、食事をしながら、さらに「あのお店のコレが美味しい」とか「アレをこう料理をすると美味しい」という話をエンドレスでできるのは特殊技能のようです。お時間あるときには、美味しいものの お話でお声掛け下さい（笑）。そんな私ですが、どうぞよろしくお願い致します。　（渡邉絵里子）

ReCLA Newsletter
November, 2012. No.21

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for Liberal Arts）
発行日｜2012年11月30日　代表｜不破有理
〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1　TEL｜045-566-1151　Email｜lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/